

早稲田大学審査学位論文  
博士（人間科学）  
概要書

「演出」される小笠原  
——新島民と呼ばれる移住者をめぐって  
Ogasawara on Stage:  
From the Cases of New Islanders in Ogasawara Islands

2017年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

山崎 真之

YAMAZAKI, Masayuki

研究指導教員： 蔵持 不三也 教授

本研究の目的は、小笠原の事例より観光業に立脚する社会における「演出」を、文化人類学の視座より明らかにすることである。小笠原は地理的に隔絶されているものの、外部との頻繁な移動が必要とされる社会である。小笠原における移動とは、観光経験から生じる外部から小笠原への移動のみでなく、小笠原から外部への移動も重要な役割を果たしているであろう。そこで、本研究は小笠原社会を観光及び移動との関連性より論じていく。

人類学が観光現象を本格的に研究対象とするようになったのは、1970年代からである(その嚆矢として、Smith, V., Graburn, N., MacCannell, D.らをあげることができる。)。これ以降、観光現象を分析していくうえでホストとゲストの枠組みが自明視され、設定されてきた。しかし、昨今の社会状況を顧みても、固定的なホストとゲストという二項対立の図式はあてはまらないといえる。観光客は単に観光経験を消費することに収斂せず、様々な社会・文化変容をひきおこしている。たとえば、観光経験がもたらされる移住によって、社会の構成員の変容が生じていることがあげられる。本研究でとりあげる小笠原(東京都小笠原村は、日本本土より1,000km離れており、アクセスに空路はなく24時間要する海路のみである。小笠原の開拓は、19世紀中頃に欧米人によっておこなわれ、その後日本人の入植がおこなわれた。また、第二次世界大戦後から1968年までアメリカ統治下であったという国内でも「異色」な歴史を有している。)は、社会の大半が新島民と呼ばれる移住者によって占められている。これまでのホストとゲストの枠組みでは、十分に小笠原社会及び観光現象を十分に説明できない。有効とされてきたホストとゲスト論を本研究の事例をもとに再考可能なことから、小笠原に着目する必要がある。現地調査をもとに、「揺れ動く」ホストとゲスト現象を明らかにし、小笠原社会の重要なしかけである「演出」とその機能を明らかにする。なお、これまでの小笠原研究において本研究で指摘する小笠原の人口代謝(入島/離島現象)や新島民による「演出」は、見落とされてきた。

序章では、先行研究の課題を明らかにした上で、本研究の視座及び目的を示している。1章では小笠原の概況や歴史、移住の現況を述べている。2章においては、戦前開催された博覧会における小笠原出展物の事例より、博覧会における小笠原の演出に焦点をあてた。殖産興業から再度の娯楽化という博覧会そのものの性質の変容に伴い、小笠原は博覧会においても出展する余地が生じたのである。小笠原の出展に関しては、小笠原と同様に明治期に日本に編入された台湾、朝鮮、樺太などの展覧会場(パビリオン)と比べるとその規模は小規模であった。また、内地の府県と比較すると出展物には近代技術が反映されていないローマテリアルな出展物が大半であった。このような出展状況から、異国と自国の「はざま」であることを巧みに用いた演出が指摘できる。

3章では、当該地域にとって新たな取り組みである生業の事例を現地調査より提示した。新たな生業に携わる彼らは、「3年の壁」という現地で表される移住後のハードルを乗り越え、小笠原に中長期間住み続けている新島民である。これらの生業は限られた環境下で見出されたモノであり、現地では「小笠原らしい」モノとして受け止められている。また、他の新島民も製作に携わり、自らつくったモノを日常生活に用いていることから単なる

土産物とは一線を画し、日常生活に浸透しているといえる。なお、後続する若手のモノづくりの担い手があらわれているものの、このような新たな取り組みに対して、周囲の新島民は阻害しない。つまり、閉鎖的ではない開放的な風潮が新島民によって「演出」されていることが考えられる。

4章においては、新島民とはゲストからホストに転位した人々であることを明らかにしていった。彼らがゲストからホストに転位する要因としてはエコツアーやエコツーリズムに加えて、かつてはゲストであった新島民の「演出」も働いていることを新島民の生活実践より指摘した。ホストとゲストという図式が形成されるまでの過程に注目し、もはやゲストとホストは二項対立という固定された図式では捉えられないといえる。加えて、小笠原から離れる新島民もみられることから、ゲストとホストは「揺れ動く」と考えられる。

5章では、父島と母島における新島民の移動、とくに新島民の離島現象に焦点をあてた。小笠原社会はエコツーリズムを成立させるために産業構造、住居形態、生活様式が左右されていることから、エコツーリズムが中心に据えられた社会が形成されている。このような社会に順応できない、もしくは価値観の折衝から新島民の離島者が生じていることが指摘できる。つまり、エコツーリズムは移住者を「淘汰」しているとも考えられる。また、新島民が淘汰されるその一方で、小笠原を離れた後に再度小笠原へ戻ってくる新島民が生じていることから、往還する新島民の移動が読みとれる。

頻繁な移動が織りこまれている小笠原社会においては、ホストとゲストの境界が曖昧であり、新島民としての帰属意識が表面化される場面はまれである。何をもって小笠原のホストであるかが認識されにくいといえる。本研究においては、現地調査の事例から新島民が小笠原島民として認識されるしくみとして、「演出」をみいだすことができると考える。そこで、終章においては新島民の多様な移動を整理した上で、小笠原における「演出」を明らかにしていく。

まず、新島民の移動は、「定住型、一過性型、定住乖離型、往還定住型、定期往還型」の5つに分類することができる。そして、新島民の「演出」には、密着の「演出」、日常化の「演出」、重ねさせる「演出」という3つの特徴がみいだせる。これらの「演出」には細かな差異はあるものの、「小笠原らしく」ふるまうことが共有されている。新島民は「演出」に携わることによってゲストとは差異化され、「小笠原島民(新島民)」として認識される。小笠原社会には、新島民を中心とする多様な移動が生じているからこそ、このような「演出」のしかけが指摘できる。また、1968年のアメリカ返還以降、小笠原は辺境の島からエコツーリズムの島として変容したが、新島民によって「小笠原らしさ」が「再編集」されてきたことから、移住者(新島民)が跡を絶たないと考えられる。